

「ふぐ」について ①

おやさと研究所教授
佐藤 孝則 Takanori Sato

天理教における「元初まりの話」は、人間世界創造の話であり、人間救済のために明らかにされた真実の話である。そこには、さまざまな水域棲動物が比喩的に登場する。それらは現存する動物であったり、想像上の動物であったりするが、そのこと自体は特に問題ではない。

元来、この「話」は根源的で普遍的なものであることから、その神意を理解することは決して容易なことではない。そうであるからこそ、教祖は“見立て”という理解しやすいたとえ話を通して、私たちにさまざまな「守護」を教え示されたのである。

また、教祖は、「元のいんねん」と「よきづとめ」の理を私たち人間に了解させようと、初めてこの「話」を明かされたのである。そして、私たち人間が誕生した経緯とその理由がこの「話」の中に示されていること、さらに「陽気ぐらし」世界への実現に向けた「いんねん」の自覚と「つとめ」の理をしつかり心におさめるよう、私たちに強く促されたのである。

中山正善二代真柱が著した『こぶきの研究』の中に、いわゆる「古記本」の一つ、「榊井本・五」が紹介されている。

その「榊井本」には、「人げんの生るふ時親子の縁を、しにてなをしるときにゑんきりのどふく、みすませば、うしとらのほふにふぐとゆうをがいる。このものをもらひうけ、たへてころあじわい、すかたをみるに、このものわたいしよくするもので、たべてあたるものであるゆゑに、人けんのいけしにのときゑんをきるしゆうごすとす。此のよのよろづきるものにしゆうごすとす。」(113頁)とある。また、「このものわ、くゑばあたるものであるゆゑ、人間のしに生、ゑんをきりとふぐにつこた。ふくとゆうもの、人間もたいしよくすれば、じみよをなくなる。よくあたるゆゑに、このりをもつて大食天の命となをさつけたもふ。」(123頁)とも記されている。

この「榊井本」の引用部分をまとめると、以下のようになる。

月日親神うしとらの方からふく(ふぐ)を引き寄せ、承知をさせて貰い受け、食べてその心味を試された。そして切る道具と定め、その理に対して「たいしよくてんのみこと」の神名を授けられた。人間の誕生は、母胎の中で繋がっていた母子間の臍帯が切られることによって、一人の赤児としてこの世に生まれる。また出直すときも同じように、「縁切り」がおこなわれる。このように、この道具がなければ、出生・出直の「縁切り」はおこなわれない。たとえば、ふく(ふぐ)を食べると食中り(食中毒)を起こし、場合によっては死に至るが、これも「切ること一切の守護の理」の事例である。

そこで、本稿では、「ふぐとゆうを」について、言い換えれば、フグという魚について、民俗学的あるいは生態学的視点から、考察する。

「ふく」、「ふぐ」の名前の由来

フグの仲間は、世界の温帯・熱帯域に広く分布するが、そのほとんどは沿岸や外洋、深海などの海水域に分布する。なかには、中国や東南アジア、アフリカ沿岸の汽水域や淡水域に生息する種類もいるが、全体的に見るとその数は少ない。分類学的にみると、世界には26属180種のフグが分布するとされるが、日本近海には、トラフグ(写真)、マフグ、クサフグ、サバフグなど7属53種が分布し、そのほとんどは海水域に生息する。



トラフグ。「マリトコ WEB 魚図鑑」
(<https://zukan.com/fish/internal356>) より。

ところが、大陸から黄海や渤海へ流れる河川の淡水域から、沿岸の汽水域にかけて生息するフグにメフグがいる。中国では古来よりフグといえばメフグを指し、「河豚」と称していた。メフグの肉はおいしく姿が豚に似ていることから、「河豚」という名が付けられたとある。このメフグは、確かにマフグに似て背面と腹面に小さな棘があり、この部分の違いで両種を判別することができる。

明の李時珍が1596年に上梓した『本草綱目』には、以下のことが紹介されている。内容を意識すると、「河豚魚は江淮・河海のどこにでもいる。形態はオタマジャクシ似で、大きいものは1尺余り。背面は青白く、側面には黄色の条がある。物に触れると怒って腹部を膨らませ、“気毬”状になることから“気包魚”とも言う。この魚は毒をもっているので人々は畏れるが、肉は白身で、いくら食べても飽きない」とある。

ちなみに、メフグの内臓と皮膚には毒があるが、筋肉と精巣には毒はないとされている。フグ類は有名なテトロドトキシンという強い神経性の毒をもち、卵巣や肝臓などに蓄えている。この毒が人間の体内に入ると、まず唇や舌のしびれに始まり、指先のしびれ、頭痛、腹痛などへと続く。次第に運動機能の麻痺、知覚や言語の障害、そして呼吸困難を経て、最悪の場合は意識の混濁と呼吸停止に至る。そのような危険を冒してでも、フグは古来より中国や日本では食用に供されてきたのである。これは、紀元前4～3世紀にかけて付加執筆されてきた『山海経』にフグを食べると死ぬと書かれてあったり、日本の縄文時代の里浜遺跡からフグの骨が発見されたりすることからも、窺い知ることができる。

平安時代の日本では、「袋」や「ふくらはぎ」といったように、膨らんだもの、あるいは膨らむものを「ふく」と表現していた。フグも腹部を膨らませることから、「ふく」とも呼ばれていた。そしてその漢字として、平安時代に編集された『本草和名』には「布久」とか「布久閉」という字が使われている。ちなみにフグの腹部が膨らむのは、口から吸い込んだ水や空気が胃の一部の「膨張囊」で溜められたことによって起きる。

江戸時代中頃から、関東では「ふく」に変わって「ふぐ」という言葉が使われるようになり、その呼び名が江戸のあちこちで使われ諸国へ広がった。その結果、今では、「ふぐ」という言葉がふつうに使われるようになっている。それでも、下関や中国地方の一部地域では、今も「ふく」と呼ぶところがある。それは、「ふく」は「福」につながる縁起が良い表現だからと言われている。そのことから、「鰻」という漢字もあてられたが、この字はアワビを意味することもあって、今ではあまり使われていない。